

---

# 優作・有希子短編連作集

森絢女

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

優作・有希子短編連作集

### 【Nコード】

N3707G

### 【作者名】

森絢女

### 【あらすじ】

優作と有希子が結婚する前の話しを、短編連作で。

ジアンジアン(初出：03/02/25) (前書き)

優作と有希子、始まりの話

あの頃私はやっと小説家としてやっていく自信がついたばかりで、とても中途半端だったのだと思う。

周囲は売れっ子作家の先生として扱いはじめ、提供される環境は一流なもので、最初は戸惑って、それを提供してくれる人々に気を使って、それでもその戸惑いや気を使っているという事実を『こんなものは馴れているのだ』というような態度を押し通してごまかしていた。だが、その一方で、それまでの生活習慣を完全に改めてしまっほどの劇的な変化は、パーソナリティには起きてはいなかったのだろう。

もちろん、一流のモノに触れる機会が増えたことで、一流の良さというモノも知り始めてはいたが、庶民的なモノの気楽さもまだまだ手放せない程度には子供で、今とはまるで違っていたのだし……。

今、一流のモノに囲まれて気楽でいられたり、周囲に対しても気を使ったりしないでいられるのも、私自身が成してきたことの結果なのだろう。一つずつ積み上げて、少しずつそれに馴染んでいったからこそ、今はそんな風にしていられる。

もっとも、その積み上げていく、馴染んでいくということに彼女のあの性格が一役も二役もかっているのは間違いない。

そう、彼女と初めて会ったのはテレビ局の会議室だった。

私のごくごく初期の出世作がドラマ化されることになり、そのスタッフや出演者と顔合わせをした時だった。

ドラマ化された小説は、私の作品の中では、今でこそ異色作とも私らしくもない小説とも評されているが、あの頃は一番の代表作で一番版数を重ね、そう、それこそ、私の環境に変化をもたらしたモノであった。もちろん、自分の書いた作品を嫌うなどということはほとんどあり得ない話だし、作品そのものの出来としての自信はあ

る。実際大きなミステリーの賞を受賞したくらいの作品だ。

だが、実のところあんな小説は私の書きたいカラーのものではなく、自分の書きたいモノを書けるようになるために、工藤優作という小説家を世に認めさせる為に、編集者に世間受けしそうなヒロインを配した作品を書くよう、ある種強引に指導された結果のものだった。

今なら編集者にそんな風に私らしくもない作品を求められたとしても、そしてそれが大変合理的、且つ、論理的な説得力の上に成り立っている求めならばともかく、そうでなければ断れるだけの自由さはある。

だが、あの頃の私にはそんな自由はなかった。

そして、その自由と引き換えに書いたあの作品が、結局は今のこの自由さを齎したのだとするならば、皮肉なものであると言う他はない。

だから、あの小説がドラマ化されると決まった時も、正直嬉しい気持ちはあまり無かった。むしろ、まだ付いてまわるのかとうんざりとしたような心持ちにしかねなかったのだ。

もちろん、賞を受賞した時点で一生ついて回るのは仕方がないことだとは分かっていたが、それでも他の作品に没頭してしまえば忘れていられるはずだったのに、結局活字媒体ではなく、ヴィジュアルとしてついて回るのかと思うと、やはり別の感慨もあったのだ。

更に、ヒロイン役が彼女であると言う事がそれに拍車をかけていた。

正直に言ってしまうえば、あのヒロインのモデルは、彼女だったからだ。編集者に、世間受けしそうなヒロインをと言われ、頭に浮かんだのはその当時アイドルとして多くの人気を集めていた彼女で、彼女がブラウン管やスクリーンの向こうで見せるキャラクターをそのまま借りたようなものだったのだ。

元気で、明るく、少しドジで、可愛くて、男が守ってやりたくなくなるような、そう、小説の主人公である探偵がまさに守ってやりたく

なるようなキャラクター。

事件に巻き込まれて殺されかける役として女性読者が共感を覚える様に、そしてそれを守ろうとする探偵役の男に男性読者が感情移入できる様に……。

結局それはツボにはまった訳だし、ドラマ化の話になった時にヒロイン役が彼女であったのは、ある意味極々自然な流れであったのは間違いない。

だが、私が書きたかったのは、後の代表作でもある『闇の男爵』シリーズのようなダークなヒーローだった。

しかし、その当時私に求められていたのは、ドラマ化された小説のような傾向の作品ばかりで……。

もちろん、『闇の男爵』シリーズは少しずつ形を為し始めていたし、それを書かせてくれる出版社もあった。当然それは、あの小説が売れたからなのだが、ヒロイン役が彼女でドラマ化となれば、そのドラマで私の作品を知った視聴者が求めるものは押し知るべしで、3歩進んだかと思っただら2歩下がる……いや、むしろ1歩進んで3歩下がるような状況になる事が、容易に予測できてしまったのだ。

だからあの日、私は執筆を続ける気にもなれず、珍しくぶらぶらと渋谷で時間を潰していた。

もちろん、あの店に入ったのも偶然だった。

旨い珈琲を飲むために、4桁の金額を要求される店に出入りするようにもなっていたが、あの日はあの小説が齎したものを全てを忌避したかったのかもしれない。

「にがつ」

「このコーヒーこんなに苦かったっけかなあ？ 煮詰まってるよ  
うな苦さだよなあ。」

前は全然気にならなかつたようなことが気になるようになってきた。俺自身は何も変わった気はしないんだけどなあ……。

紙コップのコーヒーをため息とともに見つめる。

「何ため息なんてついてるんですか？」

少し驚いて顔を上げると、見知らぬ女の子が立っていた。

サマーニットの水色のワンピースに、水色のリボンのついた麦わら帽子、そしてポシェット。

高校生くらいの地味な感じの女の子だ。

丸眼鏡の奥の眸だけが、その地味そうな雰囲気に対して好奇心でいっぱいだった。

俺の代表作になっている推理小説は、そのヒロインの設定や作中の活躍ぶりから、高校生くらいの女の子にもとても人気があるから、きつとこの女の子もそのファンの一人なんだろうなあなんてぼんやり考えた。

街中で突然声をかけられるのは、最近割と頻繁にある。

作者がまだ二十代前半の若い男だつて言うのも、女の子達の興味を引いているのだと、編集者が言っていたから、有名税みたいなもので仕方が無いのかもしれないけど、ハッキリ言つて面倒くさい。

俺は、その女の子から視線を外して、手元に置いていた尊敬する作家の文庫本を開いた。

その作家は推理小説以外のジャンルだったが、子供の頃から多大な影響を受けて育つたせいかな、こうやって自分の執筆活動や、作家としてのアイデンティティーに迷いが出ると、ついつい手にしてしまふ。

強烈なカリスマを発するその作家をリアルタイムで知っているわけじゃない。

過去の事件の特番などで、彼が最期の場所として選んだ市川駐屯地での姿を見たことはあるけれど、その姿と彼の作品は自分の中ではまるで結びつかなかった。けれど、あのカリスマ故の結末はとて

も彼らしいとも思ったし、反対にどうしてあんな行動に出たのか、全く理解できもしなかった。ただ、あの行動を知っていても、あの決起に至る衝動は、嫌、あれほどの同志を連れていたのだから衝動ではない長い軌跡があるのだろうけれど、それでも衝動と感じるあの行動は、彼の作品からは立ちのぼってはこない。そして、彼の作品を読む度にそれを確認して安心している俺自身がいることに、最近気がついた。

もちろん、俺が個人的にそう思うだけなだけどなあ……。他の人が読めば、色濃くその衝動を感じるのかもしれないけど、俺には感じることはできないんだ……。

「うふふ……」

思ってもみなかった小さな笑い声が、向かいの席から聞こえたことで、俺はさつき以上に驚いて顔を上げる。

「先生つて、そんな難しい顔して本読むんだ……。もしかして小説書く時もそんな顔してるの？」

心底おかしそうに笑うその女の子に不審の目を向ける。

「別に僕は先生なんかじゃありませんから……」

『先生』と呼ばれるのにも、実のところ馴れてきてもいた。けれど、あの作品から逃れるようにして街に出てきた今日は、そう呼びかけられたくはなかったんだ。

「じゃあ、優作さんって呼んだ方がいい？」

あまりにも一気に差を縮めようとされた気がして、思わずムツとした顔になったのを誰にも責められるいわれは無い筈だと思う。

なのに、その女の子は、その僕の顔を見て思いつきり不機嫌な表情を浮かべる。

全く冗談じゃない。作家は芸能人じゃないんだからな。いくらファンでもそうそう愛想を振りまいてられないってもんだよな。

俺はその表情を無視するかのように、また文庫本に視線を戻した。「顔合わせの時も無愛想だと思ったけど、いつもそんなに無愛想なんだ。つまらないわ」

顔合わせ？

もう一度その女の子の顔をしげしげと見つめた。

顔合わせって、何のことだ？

最近俺が出た顔合わせって称する集まりは、それこそあのドラマのキヤスト、スタッフなんかの顔合わせしかない。でも、こんな女の子なんていたか？ まあ、これだけ地味だったら覚えてなくても当然かもしれないけど……。スタッフの一人かなあ？ それともキヤスト？ 俺のあの作品にこんな地味な登場人物はいないんだけどな？

「あ、もしかして私のこと分らないんだ？」

その女の子は、なぜだかやたら嬉しそうにそう言うと、周りをキョロキョロつと見回して、口元だけニヤツとゆがめて眼鏡を外した。俺は確かにどこかで見たことあるような気がして、でも思い出せなくて、首を傾げた。

「もう、優作さんって女の顔を覚えるの苦手なの？ 日本の男達のアイドルの顔も分からないなんて、信じられないわ」

あ！

おい、何だ、ヒロイン役の藤峰有希子だ。

「なんでこんなところにアイドルがいるんだよ。仕事忙しいんじゃないのか？」

その存在が周りに知られて起きるだろう騒動を予想して、俺はいきおい小さい声になる。

「今日は珍しくオフです。アイドルっていつでも他の娘達みたいに歌とか出していないから、睡眠時間2時間なんてことはないわよ」

ニコツと、そう、日本中の男共を魅了するその笑いを、俺だけに向けると、藤峰有希子はまた眼鏡をかけて地味な女の子の振りをする。

「君は……、さすがに女優だな。どこにでもいる地味な女子高生にしか見えなかったよ」

心底感心すると、俺は素直にそう言った。

「ありがと。だってこうでもしないとゆっくりファーストフードの店にも入れないんだもの」

「アイドルでもこんな店に入るんだな」

「そりゃ、入るわよ。優作さんだってベストセラー作家なのに出入りしてるじゃない。一緒でしょ？」

「アイドルなんて言うのは、それこそ高級店にしか出入りしないものだと思ひ込んでた。」

「食事と言えば高級フランス料理かイタめし、あとは焼き肉？」

「ステレオタイプな想像だな。」

「俺は苦笑を漏らす。」

「なによお。何がおかしいわけ？」

「少し口を尖らして不満を訴えるその顔は、確かにあの小説のヒロインのように『元気で、明るく、少しドジで、可愛くて、男が守ってやりたくなるような』キャラクターを垣間見せる。」

「いくら地味に変装しても、そういうキャラクターはなかなか隠しおおせはしないのだろう。そういう意味では……、やはりあのキャラクターは正しかったんだろうな。」

「いや、別に何でもないよ。君はやっぱりあの役にピッタリだなと思ってるさ」

「そうだな、多分、今日本で、目の前にいる女優以上にあの役にはまる女優はいないだろう。」

「ピッタリか……。原作者にまでそう言われるってことは、喜んでいいのか悪いのか、複雑な気分ね」

「そう言うつと藤峰有希子は首をすくめてみせた。」

「どうしてなんだい？」

「だってね、原作者にぴったりって言われるってことは、あの役の性格とかイメージが、私の性格とかイメージに重なるってことなんでしょ？ もちろんアイドルとしてはそう言うイメージで売ってるんだし、そう見られても仕方ないなって思うけど、現実の私を知ってる人にまでそう思ひ込まれたくないなって感じ」

俺は不思議な感じがした。

だってそうだろ？ テレビで見る藤峰有希子も、そして、今日の前にいる藤峰有希子もあの役にぴったりというふうには感じられない。

確かに俺は、現実の、生身の藤峰有希子を知ってる。でもそれは、ブラウン管の向こう側でしか見ていないファンたちと大きな差があるってことじゃなく、そうだな、多分、コンサートとかで舞台上に立っているアイドルを生で見るといってのと大差ないっていう程度のことじゃないだろうか？ もちろん、こうやって個人的に話す機会を持てる程度には直接知っているのだろうけど。

それに、大体、直接知っている人にまで言われたくないって言われても、実際に知っていてもそう思うんだから仕方がないと思うんだが……。

「君はあの役を演じるのはいやなのか？」

「いや……では……ないわね。あの作品は推理小説の大きな賞を取ったものだし、女優としてのキャリアにはプラスだと思うし……」

少し考える風にしてそう言うと、藤峰有希子は俺の眸をまっすぐに見つめ返した。

「ただね、あの役が素の私と重ねて語られるのは、ちょっといやかな？ って気分なのよ」

「要するに……、本来の自分とは違うって主張しているわけか、君は」

少し、いや、大分苦みのあるコーヒーをもう一度口に運ぶと、少し顔をしかめながらそういった。

「なんだか優作さんって、私の言うこと全然信じてないって感じ〜」  
藤峰有希子はムツとしたような口調を隠すでもなくそう言うと、

一瞬周囲に視線を走らせ顔を寄せてきた。

「まさか『元気で、明るく、少しドジで、可愛くて、男が守ってやりたくなるような』魅力で日本中の男を虜にしている私が、素でもそうだななんて思ってる訳じゃないわよね？」

上目遣いに俺のことを睨むその表情そのものが、そういうイメージに直結してるんだけどな。

俺は一つため息をつく、「自分で、日本中の男を虜にしてるって……普通言うか？　いくら女優で自意識の固まりとは言えさ」と言った。

「あらその通りなんだからいいじゃない」

脱力……。

思いつきり脱力……。

このくらい思い込みが強くないとやってられないかもな、女優なんて。と、すると、この思い込みというか、自意識過剰の部分なんかは、確かにイメージとは違うよな。

とても逆説的な意味ではあるのだけど。

「なぐんか、とつても疲れた顔ね？」

「べつつに〜」

真面目なんだか、冗談なんだかさっぱりわからねえよ、この女優は……！

俺は隠そうともせず、ため息をついた。

「ねえ、優作さん。この後どうするの？」

「え？　どうって？」

いきなり違う質問をされて、俺としては少々戸惑ってしまった。

確かに、論理的というよりも感覚的に生きてるタイプだという感じはするけれど、もう少し会話に論理性を取り入れてほしいもんだよな。

「私ね、オフなの、オ・フ」

「ああ、そう言ってたな。で？」

珍しくオフだって言ってたけど、たまのオフになんでこんなファーストフードの店なんかにいるかなあ？　部屋の掃除とか、買い物とか……あ、ここ渋谷だもんな。若い女の子は買い物って言えば渋谷とかに来るよな。

「だから、ね？　どっかいこ？」

「は？」

この話の飛躍はいつたいなんだ？ だってそうだろ？ 俺と藤峰有希子は、たまたま偶然ここで会っただけなんだし。

そもそも、俺にしてみればあの小説から離れたいと思って渋谷なんて街に、そう、あの小説を書いて賞を貰って……なんて生活になる前の、小説家になるのが夢で必死でただひたすら、発表するあてもない小説を書いていた若造だった頃にぶらついてた街に出てきたんだ。それなのに、どうしてもあの小説を強く意識させられる主演女優なんかと一緒にどっか行かなくちゃなんないんだよ。勘弁してほしいって感じだよな。

俺は無視を決め込むかの様に、もう一度文庫本に視線を落とす。

と、目の前に手が伸びてきて文庫本を取り上げられた。

「もう。無視することないじゃない。こんないい女が誘ってるって言うのに」

「はあ？」

いい女って……、俺よりも年下の女の子に「いい女」と主張されてもなあ。せいぜいが「かわいい娘」くらいじゃないのか？

「とにかく、優作さん暇そうだし、今日はつきあってくれるよね？」

「おい」

確かに暇と言うか、別に予定はないけど、だからって何で藤峰有希子につきあわなくちゃいけないんだよ。

「で、コーヒーも飲み終わつたみたいだし、出ましょ？」

そう言うのと、藤峰有希子は立ち上がってさっさと俺のコーヒーの紙コップもかたづけってしまった。

呆気にとられてしまった俺は、悪くない。

絶対に悪くない！！ 咎だ。

でも、呆気にとられてるうちに俺は藤峰有希子に腕をとられて、表通りを引つ張られて歩いてた。

「おい、おいつてば」

どうしても周りが気になって小声になってしまつた。

「こんなところ写真週刊誌にでも撮られたらどうするんだよ」

藤峰有希子はちらつと俺の方を見ると、口元に楽しげな笑みを浮かべて「番宣になるわね」と言っつて、またどどん歩いていく。

番宣だあ？

あんな小説のドラマがそんなことで話題になって、いろんな人間に見られるのなんかごめんだ。

俺は藤峰有希子の右腕に絡んでいゝ俺自身の左腕に力を入れ、同時に右手で彼女の右腕をつかむと、左腕を絡んだ彼女の右腕から引き抜いた。

「藤峰さん、頼むよ。俺、今日はあの小説のことを忘れたくて渋谷に出てきたんだ。なのに番宣なんて冗談じゃないよ」

多少情けない声だったなと思いつながら、そのくらいオーバーにしないとこの押し強い女優にはかなわないとも思つた。

でも、意外なことに彼女は立ち止まつて俺の眸を覗き込むと、「そんなにあの小説が嫌いなんですか？」と尋ねてきた。

「う……」

一瞬言葉につまつてしまふ。

好きか嫌いかなんて二者択一で尋ねられて答えられるほど単純な思ひじゃないんだよ。

俺は少し考えて、それで、ほとんどやけくそな気分て口を開いた。「嫌いじゃない、でも、好きつて訳でもない。作品に自信がない訳でもない。でも、だけど、書きたくて書いたものでもない……。だからちよつと……あの作品が注目されることに対して、心から嬉しいと思えない……そんな感じなんだ」

「ふ……ん」

ドラマの主演女優に言うべきことじゃなかつたかもとちよつとだけ思つたけど、口から出たものはもう無かつたことにできないよな。少しだけ気まずい気分て、俺は彼女を見返した。

俺と視線が絡むと、彼女はニコツと魅力的に笑つて、「本当は闇の男爵みたいな話書きたいのは分かるけど、でも、やっぱりあの

小説が優作さんのターニングポイントなのは事実じゃない？」と言った。

え？　なんで？　俺、闇の男爵みたいなタイプの小説を書きたいなんて、藤峰有希子に言った覚えなんてないんだけど……。

クスクス笑い出した藤峰有希子を、なんだか別の世界の住人を見るような気持ちで眺めていると、少しだけ真面目な顔をして、彼女は周囲を見回す。

そしてもう一度、今度は俺の手を握ると今度はゆっくりと歩き出す。

俺もそれにつられてついていく。

「一応、この役の話がきた時に優作さんの本は全部読んだわ。だから、そうなんだろうなって思ったの」

驚いた。

イメージからして、本なんて全然読まないタイプかと思ってたよ、悪いけど。

そんなことを考えてて、引かれる手を気にとめていなかったせいか、いきなりその地下への入り口が目の前に現れたような錯覚を覚えた。

渋谷はよくウロウロしていたけど、こんなところにこんな地下への入り口があるなんて思いもしなかったよ。

「ちようどいいくらいかな？」

そういうと、彼女はためらうこともなく降りていく。手を引かれて俺も自然降りていく形になってしまった。

入り口でチケットを渡している彼女を見て、ここが劇場であることを理解する。女優が劇場に来るのなんて当たり前だよな。

でも、そのチケットは2枚あって、だけど、俺は偶然藤峰有希子と会った訳で……。

「誰かと来る予定じゃなかったのか？」

「え？　ああ、チケット？　二枚もらったんだけど誘いたい人がいなかったから一人で来るつもりだったんだ。でも優作さんに会った

ら優作さんを誘いたくなっちゃったの」

そう悪びれもせず言う彼女は、百席ばかりの観客席がいつぱいな  
のを見てにっこり笑った。

「なんで？」

「うん、きつと優作さんには今日のステージは必要だと思ったの。  
私もそうだったし……」

彼女が俺の何を見てそう感じたのかは分からないけど、この空間  
に集う人々の落ち着いた雰囲気と、けれど静かな期待感が心地よく  
て、俺は積極的ではないにせよ、これから催される舞台を楽しむこ  
とにした。

「座席どこ？」

そう尋ねた俺に、笑みを顔に浮かべたまま「全席自由よ」と答え  
る彼女。

つまり……、立ち見？

一瞬焦った表情をってしまったのかもしれない。彼女は思った通  
りの表情を俺が浮かべたことを喜んでいるかの様に、また手を引い  
て歩き出す。

よく見ると通路に座布団が置いてあり、座席に座れない人間はそ  
こに座るらしい。

でも、ステージの真ん前とかにも座布団席はある訳で、もしかし  
て後からゆっくり来てそこをGETするのが一番おいしいんじゃない  
だろうか？

俺は結局その真ん前の座布団席に、藤峰有希子と並んで座る。

ほどなく始まった舞台は、女優が見にくるんだからお芝居だろう  
という俺の予想を見事に裏切って、シャンソンのライブだった。

その歌い手を、俺は知らない。シャンソンだってそんなに聞いた  
ことはない。

けれど、恋や愛を朗々と歌い上げるその切ない歌声は、小説を書  
いていながらも、それほどそんなものに対して重きを置いてこな  
った俺の心臓を鷲掴みにする。俺が分かる曲といえば、すごくメジ

ヤーな『すみれの花咲く頃』だの『百万本のバラ』だの『モン・パ  
リ』くらいなものだったけど……。

もちろん、人の営みの基本である愛や恋を避けて通れる訳もないし、推理小説の題材になる殺人事件の発端に愛憎が絡むことなんていくらでもある。でも、俺はそんなものを一つのプロット上の駒としてしか扱っていなかった。だから、よけいに俺はストレートに感じられたのかもしれないけど……。

けれど、最後にその歌い手が、これは特別なのだと言うかのように歌った『ヨイトマケの唄』という歌に、俺は金縛りにあったかのようなシヨックを受けた。

それは、愛でも恋でもなく、ただただ母親のことを歌い上げる。

俺は……。俺は身体が震えるのを抑えられなかった。

座席に座っても、ずっと握られていた手を、初めて俺は握り返す。多分、歌の中での『僕』は母親に自分の根っこを見いだしているのだろう。

もちろんそれだけじゃないだろうけど。

でも、今、人気作家になって来て、だからこそ根っここの部分が不安定になって来てしまっている俺の中に、その部分が大きく響いたんだ。

そう、俺の根っこは……。

別に人気作家になりたいとか、いい生活がしたいとか、そういうことが目的で小説を書いて来た訳じゃなく……。

俺は……。書かすにはいられないんだ。

俺は、小説を書きたくて小説家になった。

それが一番の根っこだ。

あの小説を書きたくなかったとか、それなのにあの小説ばかりクローズアップされるとか……。そんなことは本当は些末なこと……。書きたくなかったなんて嘘……。書きたい小説じゃなかったのは確かだけど、でも、小説を書いてそれを出版してもらえただけで本当は幸せだったはずなんだ。

けれど、どこかで卑屈な思いで自分のスタンスと違うものにおもねたという劣等感みたいなものを凝らせてしまつて、そういう小説そのものを書けるつていう幸せを忘れてしまつていたんだ。

ただ、ただ、呆然と、俺は、その歌い手を見つめ続けていた。

繋がれた手に、彼女のもう片方の手が重ねられていたのに気がついたのは、その歌い手が舞台の上から去つてから暫くしてだつたと思つ。

私はあの舞台を見てから変わったのだと思つ。

作家としてのターニングポイントになつたあの小説と同じように、いや、もっと自分の中で大きく意識されてるものとして、あの夜のこととは忘れることはない。

自分の作家としての根を決めるのは自分自身なのだろうけど、まだ若かつたあの頃には、それはとても難しいことで、だからこそ不安定で……。そして、その不安定さ故に私は目をつぶっていたかつたのだ。

あの小説のことを……。

今でもあの小説は、ほろ苦い思い出の一つとして自分の内にある。多分、今あの頃のようにあのタイプの小説を依頼されれば、それを私が書く事に意味があるのだという合理的、且つ、論理的な説得力がなければ引受けることはないだろう。

けれど、目をつぶつたままあの小説を自分の中で無かつた事にしようと思つ気持ちは、ない。

あの夜からなくなつた。

自分がどう歩いていくのか、どのように作品を発表していくのか、発表して来たのか……。それを決めるのは、結局のところ私自身の内にある思いなのだと思ひ決めたから、なくなつたのだろう。

そして……。今があるのだから、それは間違つていなかつたと……

思いたいね。

だから、それを理解するきっかけを作ってくれた彼女にはとても感謝している。

彼女とあの日繋いだ手は、今も変わらず繋がれたままであることも、あの夜を肯定的にとらえることのできる要因なのかもしれないが……。

彼女自身も、自分が女優でいることの根っこの部分で悩んでいた時があったのだと、後で知った時には、すごく不思議だったがね。

あれから何年もの時を共に過ごして来て、確かにあの頃アイドルとして世に見せていたイメージとも違う彼女も知ったのは確かだが、そのイメージそのままの彼女が彼女の大勢を占めているのも事実だとも知ったからだろう。

けれど、私はそれをも愛しいと、今ではそう思っているのだけだね。

完

ジアンジアン(初出:03/02/25) (後書き)

渋谷ジアンジアン:1971年創設、1998年閉館の小劇場。ユニークな公演が多かった。私は2、3回しかこの劇場に入ったことはないのですが、閉館したのが残念です。

r e s p e c t   p e r s o n s (初出：04/01/19) (前書き)

優作と有希子、少しでも進展した話

彼女はといえば、完璧に『元気で、明るく、少しドジで、可愛くて、男が守ってやりたくなるような』アイドルの顔を見せている。

共演者やスタッフのほとんどを、自ら持ってきたカメラでフレームにおさめていく。

今回の撮影で初めて共演した役者、スタッフとは撮影を周囲の人間に依頼して、自分も共にそのフレームの中……、というのは、隣に座る脚本家が教えてくれた。

この脚本家は、彼女の演技を気に入っているらしく、何度も自分の書いた脚本の主演に起用している……、というのは、撮影の見学に無理矢理プロデューサーに呼び出された時に、彼女が教えてくれた。気に入っているというだけあって、俺が書いた原作の主演女優として、彼女の役どころが引き立つような脚本に完璧に仕上げてきた。

その気に入りが、役者としての才能故に……なのだろうという事がはつきりと分かるほど、彼女には厳しいものではあったけど……。脚本自体は、脇の扱いに少しばかり不満もなかった訳じゃないけど、2時間半の枠の中では仕方がなかったという事は、いくら俺でも分かるから許容してはいる。それに、大勢に大きな影響はない程度のも不満だ。

文章が映像となる時に、増幅されてより良いものになるという過程を、今回見させてもらった事は、今後の執筆の糧になるかもしれない。

そう考えれば、プロデューサーの思惑にのって、何度か撮影を見学した事も意味があるのだろう。

とはいえ、打ち上げにまで呼ばれるとは思ってもしなかった。

ドラマ撮影の打ち上げに原作者が呼ばれるような事は、珍しい事であるのだから、多分俺が、新進若手作家としての話題性というものを背負ってしまっているから、それをも利用してしまおうと

いう事なのかもしれない。あの、いかにも「やり手！」というオーラを醸し出しているプロデューサーが考えそうな事だ。打ち上げの前半は、マスコミに開放されていた。

俺も取材と称する相手に取り囲まれてまごついていたのを、この脚本家が気を利かせてスイスイと会場の隅の目立たないところに誘導してくれたのだから、感謝するべきだろう。

脚本家とは、原作をドラマの脚本として落とし込む前に、ずいぶん打ち合わせをしたので、それなりに親しくなっていた。

10歳ほど年長の脚本家は、正統派というよりも、少しだけスラックブスティックな味付けをする事で有名で、それが、この小説の雰囲気合っているだろうという事は、プロデューサーに力説されるまで思いもなかったけど、打ち合わせと、撮影の見学を通してそれは実感していた。

撮影に入る前は、あれほどこの小説に対してのわだかまりがあったっていうのに、現金なもんだと我ながら呆れる。

もっとも、あとで思い返した時に、嫌な思い出としてしか残っていない状況よりは、絶対いい筈なんだと分かるから、気にしない事にした。

大人になろうと思った……、なんていうのとは違うけど、作品に対してのスタンスは、やっぱり少し変わったんだろう。

彼女が連れていってくれた、あの、渋谷の地下の舞台を見て……。そして……。彼女と出会って……。

「先生たち、写真、写真！」

会場を一巡したらしい彼女は、最後に俺達の座っている隅にやってきた。いつもと変わらない『元気で、明るく、少しドジで、可愛くて、男が守ってやりたくなるような』雰囲気身を纏ったまま。

そして彼女は脚本家と俺をフレームにおさめ……。、「工藤先生とは一緒のお仕事初めてだから、一緒に写しましょう！」と俺の横に座り込み腕を絡ませる。

気が付けば、脚本家がカメラを構えていた。

「じゃあ、工藤君、もう少しにこやかにね」  
そんな事を言いながらシャッターを切る。  
微妙に口元が引きつるのが、自分でも分かった。

「はあ、疲れた」

腕を前にのぼしてかわいらしく伸びをすると、彼女はこの目立たない隅に居座る事を決め込んだように、ソファの背もたれに身を預ける。

「有希子ちゃん、飲み物は？」

「え？ 写真撮ってて何も飲んでませうん。あ、そう言えば何も食べてないわ」

彼女がそんな風にいうと、『仕方がないなあ』というような表情を浮かべて脚本家が立ち上がる。

「俺とは何度も話してて飽きちゃってるだろうから、工藤君、有希子ちゃんの相手してあげてよ」

そう言いおいてバイキングのカウンターへ行ってしまった。

「ね、優作さん、このあとどこかで待ち合わせしない？」

彼女は会場の方を見たまま、小声でそう告げた。

誰かがこつちを見て、そんな言葉が彼女の口から漏れてると思われぬだろう。

「いいけど、今日は変装もしてないから、まずくないか？」

今日は頭のとっぺんから足の先まで、アイドル女優「藤峰有希子」にしか見えない。この前の渋谷のように地味な高校生の変装はしていない。

何処に行くにしても、看板背負って歩く事になるのは目に見えている。

「事務所の車にどこが目立たないところで降ろしてもらってから、いい場所ない？」

「車か……」

幸い、俺も車だった。

そして、飲酒運転はしたくなかったので、酒を飲んでいなかった。締め切りが近付いてきていたが、もう少しだけ余裕はある。電話でしか話せなくて、二人だけで会うのは、撮影の見学に行った時にみんなの目を盗んで、ほんのちよつとの間彼女が連れ込んでくれた、現場の裏以来だったから、執筆よりも優先したかった。車なら、どこか店に入ったりしなくても、一緒の時間を過ごせるよくな気がする。

出演者の年齢層が、主演女優のそれに合わせて比較的若いという事があった、始まった時間も早かったけど、終わる時間も早い。8時過ぎの終了予定だった。

もともと、だから、締め切り前の少々忙しい時期に、参加出来ただけと……。執筆していつてくるのは、やはり夜中なので。

今日は平日だ。

道の混み具合を考えて、俺は「じゃ、解散から1時間後に新宿の目で待ち合わせよう。わかるか？ 新宿の目」と訊ねる。

「ええ、わかるわ。でも、甲州街道、1時間もかかるほど混んでないと思うけど？」

「俺はすぐに出れるだろうけど……」

「そっか、解散しても周りに色々捕まっちゃうわね……」

「それに、マスコミが付いてきたらぐるぐる回るんだろ？ 俺の方が先に行って待ってるさ。あそこなら車乗り換えるのは目立たないしな」

「……」

一瞬、彼女がムツとしたような表情が見て取れた。

その、瞬間に浮かんだ表情に困惑して、「どうした？」と訊ねていた。

「あそこが車での待ち合わせに便利だなんて、知ってるんだ？」

「え？」

「いいの、優作さんは気にしないで。ちよつとした……ジェラシーだから。じゃ、あとでね」

そう言うと、彼女は俺に口を挟ませないように立ち上がり、あつという間に仕事の仲間達の輪にまぎれてしまった。

相変わらず、彼女の言葉と行動は、俺の予想の範囲外だ。

そりゃ、昔つきあつてた女と待ち合わせに使った事は……結構あるけど、そんな事気にするなんて思わないじゃないか。いつもあんなに自信に満ちた女優の顔してるのに……。

今も、さっきの一瞬の素なんて覆い隠して、脚本家からジュースと料理の乗った皿を受け取っている。脚本家の期待に応えた主演女優の顔をして……。

半地下になった西口ロータリーに抜けるトンネルの、出口ちよつと手前に車を停めた。

もう少し早い時間ならNSビルの大きな振り子時計の前辺りで待ち合わせをした方が、更に人目に付かないかもしれない。けれど、この時間なら、同じ西口でも地上に比べてこちらは少し人通りが少ない。

都庁が移ってくれば、西口ももう少し開けるのかもしれないけれど、オフィス街としてのにぎわいも、さすがにこの時間になれば少しだけ落ち着いてしまう。だから、それほど路駐の車も多くはなかった。もつとも、小さい車だからほんの少しの隙間でも停めれるのだけ。同じ新宿でも北口は、それこそ、これから本当の街の顔だろう。歌舞伎町や二丁目の人の多さ、車の多さを思い浮かべながらそんな事を思う。

ちらっと見た「新宿の目」は、相変わらず何を見つめているのか、想像すら阻むようにそのサイズでもって威圧する。

芸術なのかジョークなのか、初めて見た時には悩んでしまったが、

結局俺は、今でも答えを見つけ出せないでいた。もちろん制作者やビルの管理者たちは大まじめに芸術だというのだろうけど……。暫くして、俺の車の前のスペースに1台のスモーク張りのワゴンが停まる。

スライド式の扉を開けて出てきた彼女は、打ち上げ会場での華やかな女優の衣装とは打って変わって、カジュアルな普段着だった。長い髪もゆったりとした三つ編みにしている。

きよるきよると一瞬周りを見回して、迷う事なく俺の車の助手席のドアを開けた。

「ごめん、遅くなっちゃった」

両手を合わせて茶目つ気たつぶりに謝る彼女に、「結構、マスコミに追いかけられたのか？」と苦笑まじりに訊ねれば、「うん、というより、スタッフの人たちに二次会誘われて断るのが大変だったの。でも、未成年だからって言って帰ってきたけど」との答え。

確かに未成年。

けれど、9時過ぎのこの時間から男と二人で出かけようというのだから、褒められた事ではない。もちろん、連れ出す俺が一番悪いのだろうけど。

「でも、すぐに車分かったな」

「そりゃ、今時、幌しててもオープンカーだつて分かったし、こんな変わった車に乗ってるの、優作さんくらいだろうって分かるわよなんて車？」

「ああ、オースチン・ヒーレー スプライトMK-1っていうんだ。もつとも通称『カニ目』で通ってるけどさ」

そんな風に説明すると、彼女は「本当、ヘッドライトがカニの目みたいね、かわいいわ」と言って笑った。

「トヨタ？ 日産？ ホンダ？」と、訊ねられて、「一応オースチンってイギリスのメーカーの車」と答えると、キョトンとした目で「右ハンドルだよな？」と聞いてくるからおかしくて、ハンドルに突っ伏す。

「肩震わせて笑わなくてもいいでしょ！」

むくれたような声でそういう彼女が可愛くて、車を発車させながら「イギリスは日本車と一緒に左側通行で右ハンドルだよ」と説明する。

「そうなんだ。私ね、映画の撮影でカーアクションとか練習したんだけど、左ハンドルの外車だったから……あの、豚の鼻みたいな車」

「豚の鼻？ ……、もしかして、BMW？」

「そうそう」

俺は今度こそ声をあげて笑う。

「もう！」

暫く彼女はFMから流れてくるDJの軽快なおしゃべりに耳を傾けている振りをしていた。

でも、俺の事をむくれた顔でチラチラ見てるから、「わかったわかった、降参。笑って悪かったよ」ってつい謝ってしまう。

とたんに機嫌を直してにつこり笑う彼女は可愛くて、なんでこんな日本中の男達のアイドルが、俺の車の助手席なんか座って、俺なんかと出かけようとしているんだろうなんて、不思議な気持ちに包まれる。

あの渋谷の日から、何となく、つきあっているというような形になつて、その関係はごく普通のカップルに比べれば居心地のいいものとは言い難かったけど、彼女が意識してみんなに見せている顔とは、別の表情に惹かれてやまないのも事実。

予想できない言動に振り回されている気もするけれど、それさえも含めて彼女と関わっていたいと思わせる何かはあって、それが恋とか愛とか呼ばれる類いのものだとは思わなくはないけれど、それだけなんだろうかと思ったりもする。

「ね、優作さんってイギリスの車が好きなの？」

唐突な質問はいつもの事で、だから俺は「なんで？」って当たり前前に問い返した。

「だって、全然メジャーじゃないこんな車に乗ってるくらいだもん」

「そうだなあ、結構好きかな？ ジャガーのEタイプとか乗りたいけど、まだまだそこまで贅沢は出来ませんって感じかな？」

「そうなんだ。そのうちどんな車か教えてね」

女なんて、どんな車の助手席かに座るのかってことをステータスにしてたりする気がしていた。

けれどその対象になる車は、どんなアクセサリを身に付けて、どんなブランドものを持って……なんて言うのと同レベルで、有名で高級な外車だったり、日本車なら流行ってる新車だったり……。

それこそBMWやベンツ、もっと贅沢を言うならフェラーリとかポルシェとか。

こんな小さくてマイナーな、カーステレオさえ付いていない（FMラジオだけはフルレストアした時に根性で付けたけど）、右ハンドルの外車なんて喜ぶはずないと思ってた。

でも、あのBMWを豚の鼻と称する彼女は、この車を存外気に入ったようで、興味津々って顔をしてメーターを覗き込んだりしてて……。やっぱり不思議な女。

「何処行きたい？ 店とか入るのはちょっとまずいかもしれないけど……」

甲州街道と交差するのとは一つ手前の交差点でそう訊ねる。

「え？ えっと、落ち着いて話しかきたいし、優作さんの部屋……」

「ダメ？」

「い、いい……けど。……まじ？」

「まじ！ でも、明日も撮影あるから12時には帰りたいの。だからタクシー呼んでね」

俺は、彼女が部屋に来る、部屋に来る、部屋に来る……って言葉だけが頭の中でぐるぐると回ってて、何をどうしていいのかわからなくなる。

かなり、動揺……してた。

鍵を開けて部屋に入って一番目に目に入ってきたものが、床の上でとぐるを巻いているファックスだった。

出版社が送ってきたそれは、予定外のゲラ校正。それも大量の。

いや、ファックスを読むとどうやら俺はそれを了承していたようなので、多分先月の修羅場の頭の中が飽和状態だった時に了承したのだらうと推測する。

「ありや……」

「どうしたの？」

「ん？ ゲラ校正。悪いけど、これやりながらでもいいかなあ？」

「いいよ」

彼女が苦笑を浮かべてソファに座る。

俺自身、さっきの車での動揺は一体なんだったんだと心の中で叫び、妄想が駆け巡った頭の中が恨めしくなる。

俺はキッチンに向かうと、「珈琲と紅茶とどっちがいい？ 一応玄米茶とかもあるけど」と彼女に声をかける。

俺はやかんを火にかけると、キャニスターのエチオピア産珈琲豆を挽く。

彼女が隣にやってきて俺の手元を見つめていた。

「珍しい？」

「現場じゃインスタントばかりだもの。それにうちの家って、挽いたものを買ってきてたし、サイフォンで淹れてたし」

「サイフォンは見た目は派手だけど、旨味を引き出すのはドリツプの方なんだ」

少しだけ得意げにそう言うと、彼女はクスクスと笑う。そして「じや私もその珈琲飲んでみる」と言った。

漂白していないペーパーフィルターの圧着部分を折って、ドリツパ―にセットし、挽いた珈琲豆を二人分いれる。

「せっかく来てくれたのに、ゲラ校正で……ごめん」

謝るのもなんだか変だよなあなんて思いながら、それでもそんな風

にしか言えない。

「別に、他人の目のないところで二人で話したかったただだし、仕事なら仕方がないわよ」

何か言おうと口を開きかけたところで、やかんがしゅんしゅんとお湯が沸騰した事を告げる。

俺はガスを止めると数秒待ってから、ドリッパーにゆっくりとたらししていく。豆が湯を吸って充分ふくらんで、泡が持ち上がってきたところで湯量を増やした。

ソファに並んで座る。

打ち上げ会場のそれとは微妙に距離が近いのが、建て前と本音を露呈させているようでくすぐったかった。

フローラルアロマにシトラスフレーバーと言われるエチオピア産の珈琲豆の味は、彼女にはどんな風に感じられるのだろうと思って、ちらつと横目で見つめる。

「おいしい。今まで飲んでた珈琲と全然違う……」

ホツと息をつくようにそう言う彼女に、少しばかり喜びを感じながら、「良かった」とだけ呟いた。

俺はペンをとるとゲラ校正を始める。

彼女はそんな俺に、自分の話したい事を倦まず弛まず話していた。

その声は心地よくて、合間に相槌や茶々を入れながら、それでも校正の邪魔になるような煩わしさは感じる事なく、ごく自然に部屋の中に流れていく。

刻がゆっくりと移っていく。

12時には帰らなくてはならないと言っていた。

まるでシンデレラのようなのだと思いつながら、実際はシンデレラのようにその美貌だけで、幸運が転がり込むのを待っているだけの女でない事を知ってしまった彼女の、その部分に惹かれているのだと思う。それを手放したくない自分がある。

見せてくれているのは、俺にだけだと思いたい自分がある。

けれど、今はまだ、12時を超えての刻を手に入れるには、早い気もしている。

まだ少しだけ、この不安定な、微妙な、関係のままにいる方がいいような気がする。

いつか手折ってしまうのだろうかと思うけれど、簡単に手折られるような女でもないのかもしれない。

それを決めるのは、もしかしたら俺じゃなく、彼女で……。手折られるのも彼女じゃなく、俺なのかもしれないなんて、考えてしまう。そう、けれど……。

まだ少しだけこの、他人よりも特別扱いの関係のままがいい。

彼女に振り回されるのも、彼女に癒されるのも、当たり前のもではなく、彼女が見せるちよっとだけの依怙鼻屑。

そんな関係のままが……。

だから、彼女が俺に電話をかけてくるのや、俺を誘うのと同じレベルで、俺に逢いに来て欲しい。

それは、彼女の気紛れに見えるようなタイミングで……。

忙しい彼女のスケジュールの中のわずかな空隙を縫って、俺がタイミングを合わせる事は難しいから……。だから、それは彼女の気紛れだと思っていたい。

俺は時計を確認すると、タクシーを呼ぶ為に電話の子機を手にした。そして立ち上がると、机の引き出しを開けてそれを取り出す。

呼び出し音のあと、少しばかりくたびれたタクシーの受付の音が聞こえる。

タクシーを1台まわしてくれるようにと話しながら、俺は彼女の手にそれを落とす。

もう一度ソファに座って、表情だけで笑って、「ん？」と言うように彼女を覗き込むと、一瞬、頬を染め、彼女はそれを握りしめた。

「じゃ、お願いします」

そう言って通話を切ると、俺は子機をもとの場所に戻す。

「10分で来る」と言おうとして彼女の方に振り返った瞬間に、俺

の首にまわされる彼女の腕……、そして、重なる唇。

相変わらぬの、彼女の予想外の行動に、目を見開いたまま固まる俺。  
彼女はクスツと笑うと、「私、身勝手に来ちゃっわ」と言った。

その笑みを見て、フツと力が抜ける。

「ん、それがいいよ、俺も」

俺も柔らかい笑みを彼女に向けて、そう言った。

そして、ゆっくりと彼女の頬に手を添えて、唇を寄せる。

これも、今はまだ、彼女のちよつとだけの依怙贖肩。

完

W e w i s h y o u a m e r r y X - m a s ( 初 出 : 0 3 / 1 2 / 2

優作と有希子でクリスマス話

どうやら世間はクリスマススイブらしい。

一瞬の気分転換の為に、窓から覗いた街並は、イルミネーションに飾られ、恋人たちが行き交い……。

思わずカレンダーを見返してしまった。

俺はといえば、年末進行で地獄のまっただ中。

出版の世界の場合、仕方のないことなのだが、年末年始の出版社、印刷所の休みに合わせて、各締め切りが通常よりも前倒しになる。

それも、軒並みだ。

昨日が締め切りの原稿が2本。

更には一昨日が締め切りだったものだって1本ある。

明日も明後日も締め切りだ。

そして、今日が締め切りのものも……。

ここまでなんとか締め切りを守って来てはいるが、そろそろヤバイ。今日仕上げてしまわなくてはならない2本のうち1本が手つかずという状態。

ヤバイ、ヤバイ。

とにかく、そんなことを考えている時間だって惜しいのだ。

それでも思ってしまう。

「俺だって、恋人とゆっくりイブを過ごしたい!!」

まあ、彼女が厳密に恋人と言えるのなら……という注釈付きだが……。

俺は大きいため息を一つつくと、カーテンを閉めて、ゆっくりと机に戻る。

部屋の中は空調が効いていて暖かいが、窓辺はやはり、ひんやりとしていた。

ガラス1枚向こうは、気温一桁の世界なのだ。

もっとも……、室内の温度がどれほど暖かく保たれていても、イブ

に1人で机に向かっているなどというシチュエーションの時点で、十分ブリザード吹き荒れる心理状態に違いはない。

もちろん、ごちそうだってケーキだってプレゼントだって、ありはしない。

今日晩も、カップラーメンだ。

もう一度ため息を一つ……。

とはいえ、デビュー前のように独り身の友人たちと集まればか騒ぎ……などという様な余裕が持てるほど、小説家として確固たる地位を築いている訳でもないのだ。

結局のところ、来た仕事、来た仕事、全てこなし実績を積むしかない状況。

もちろん、大きな賞はもらえたけれど、それだけで食べていけるほど甘い世界でもない。

デビューしたての若造という扱いから、小説家の先生というような扱いに周囲は変化して来てはいるけれど、そこで驕ってしまえるほど単純でもなかった。

なにより、本当に書きたい「闇の男爵」シリーズを世の人々、いや、まずは出版社に認めさせる為には、そこに至る為の過程をこなす必要があるのだ。

そのことが分かる程度には、周りが見えているとは思っている。更に、もう一回だけため息を……。

俺はキーボードに指をのせると、猛然とキーを打ち始める。

ディスプレイには、文字が、単語が、文章が、物語が、どんどん表示されていく。

物語の中に入り込んで、気分がハイになっていたんだと思う。いわゆるトランス状態。

いつもよりかなり速いペースで執筆できた。

もう駄目かと思っていた2本目も、なんとか無事間に合った。

最後の句点を打って確定キーを押下すると、俺はそのままテキストデータをファックスとして出版社に送った。

いちいちプリントアウトしないで送信できるというのは、本当に楽なものだ。

文明の利器に感謝しつつ、俺は思いつきり伸びをした。

「おつかれさま」

声とともに後ろから手が伸びて、机に珈琲カップが置かれた。

「のわっ!!」

思わず意味不明の叫びをあげると、俺は文字通り椅子の上で仰け反ってしまった。

「い、い、いつ来たの?」

会いたいと思っていて、でも、お互いに忙しくて、暫く会えなかった彼女がそこに立っていた。

「さつきよ。下から見たら明かりがついているのに、いくらインターフォン押しても出て来てくれないから、合鍵で勝手に入っちゃったわ、ごめんなさいネ」

にっこり笑ってそういう彼女に、俺はブンブンと首を振って「いや、こっちこそごめん、執筆に夢中になつてた……」と言う。

「ええ、さつきから見えて分かってるわ」

笑顔を崩さずそう告げる彼女を、上から下、下から上と視線を忙しなく動かして見つめてしまう。

「今日、仕事って言ってなかったっけ?」

俺も締め切りに追われていたけど、彼女も年末特番の収録に追われていたんじゃないか?」

「思ったより早く終わったの。みんなイブだから早く帰ってたみたい」

彼女は俺の座っている椅子のひじ掛けに、腰を引っかけると、両手で包み込むように持った珈琲カップを口に運んだ。

俺も、せっかく彼女が淹れてくれた珈琲を冷めないうちにとあって、

カップに手を伸ばす。

執筆が終わった後に、頭と身体を弛緩させながら飲む珈琲は、なにも替え難い。

それを彼女が知っている訳でもなかったのだろうけど……。

「今から出かけても、レストランは予約で一杯だよな……」

そう呟いた俺の言葉が耳に入ったのか、彼女は「あ、食べるもの買って来たわ」と言った。

「ファーストフードのフライドチキンだけだね。あと、ケーキはこの前行ったケーキ屋さんのクリスマスケーキを買って来たわ」

「それで十分。本当だったらカップ麺でもすすするしかなかったんだし。」

そう言っただけで、彼女もうふふと笑った。

それは、日本中の男たちが魅了される女優の笑顔ではなく、俺だけに向けられるふくよかな笑顔だった。

いつから……と問われれば、あの渋谷の街で会った時から……と答えるしかないのだろうけど、合鍵も渡しているのに、俺達二人がつきあっているということを確認し合ったことがなかった。

まだ、深い関係になっていないというのもある。

けれど、その笑顔を見れば、そんな確認などしなくてもいいのではないかというような気にさせられた。

指についた油をペロツと舐めるその仕草が子供っぽくて、だけど気取らないその姿を世の男どもは知らないのだと思うと、少しだけ嬉しかった。

独占しているなんて思っている訳じゃない。

でも他の、そう、不特定多数のファンたちと共有していると思っ

いるのでもない。

けれど、間違いなく、俺にだけ見せてくれているその姿は、女優のそれではなく、素のままの彼女だから。

いかにも有名レストランのフランス料理しか口にしないようなイメージの彼女が、実のところ楽しそうにファーストフードのチキンを食べているのだ。

思わず笑ってしまった俺に、彼女は「なに？」というような表情を向けた。

「いや、今日もファーストフードだし、渋谷で会ったのもファーストフードだったし……ってさ。一応、お互いに高級レストランとか色々知ってるのに、二人で行ったこともないよなって」

俺の言葉に、彼女は声をたてて笑う。

「いいじゃない。優作さんと気取ってそんなところに行くと、お仕事の付き合いで食事につきあわなくちゃいけない人たちと一緒にになっちゃうもの」

「……それも、そうだな」

俺は、彼女を高級レストランに誘う時は、それなりの理由と覚悟を決めてからにしようと思った。

少なくとも、仕事上でつきあわなくちゃいけない奴らと同列には……なりたくない。

「あ」

そう言えば、今日はイブなんだった。

「ごめん、プレゼントの用意もしてなかった……」

くりくりの瞳を、いつもよりも更に見開いて、俺を見つめる彼女は心底驚いているようだった。

「私も忙しくって……」

そういつて首をすくめると、にっこり笑う。

それが本心からかどうかは分からない。

何しろ女優だからな。

俺に気を使ってくれているだけかもしれないし……。

でも、今日の収録の笑い話とか話してる彼女は、とても自然だ。もしも演技だったとしても……、彼女がそんな風に見せたいんだったら、それはそれでいいのかもしれないなって思った。

フライドチキンにコールスローサラダ、ビسケットにメープルシロップかけて、飲み物だけは腐るほどサイドボードに眠ってる貰い物のワインをあけた。

保存状態とか気にするほど、高級なものじゃない。

フライドチキンの入っていた紙製のバケツに、食べたあとの諸々を突っ込んで、テーブルをざっと片付けると、グラスとボトルだけもってリビングのソファに移動する。

といっても、リビングダイニングキッチンなんだから、ダイニングテーブルから2歩だ。

BGMなんて気の利いたものを用意しているほどの暇はなかったから、適当に最近買って来たアルバムをCDのトレーに突っ込んだ。アルコールで少しだけ色付いた頬に笑顔を貼付けたまま、彼女は隣に座る俺の方を見つめる。

「酔った？」

「そういえば、今さらだけど、彼女は一応未成年だったか……。」

「うん、少し」

無邪気にそう答える彼女は可愛いけど、酔ったと言っている未成年者にこれ以上飲ませるのはまずいよな。

俺は彼女の手からグラスを受け取ると、テーブルに置いた。

「未成年者が酔っぱらったところを写真誌に撮られたらまずいだろうか？」

タクシーを呼ぶにしても、何処から話しが漏れるかもしれない。それだけ彼女が有名人だということくらいは、俺だって自覚しているのだ。

まして、今日は渋谷のあの時のように変装している訳でもない。

彼女はアイドルだから、いろんな記事が出る。

好意的なものも多いけど、スキヤンダラスに、悪意に満ちた記事だつてない訳じゃない。

それをバネにしてしまうんだからすごいけど、未成年の酔っ払いは、やっぱり、ちよっと、まず過ぎるよな。

「ね、プレゼント、用意してないんでしょ？」

いたずらを思い付いたような口調でそう言われて、思わず彼女の瞳を覗き込んだ。

「うん、だから、ごめん」

素直に謝ると、彼女はクスクス笑う。

「でも、やっぱりプレゼント欲しいの」

「え？」

今から何か用意するには、何処の店も閉まってるぞ？

銀座まで足を伸ばせば……多分何か見つかるだろうけど。

でも、夜の女性の為のプレゼントを置いている店で、彼女へのプレゼントを買うのは、何か違う気がする。

東京は眠らない街だっていうけれど、それでもやっぱり夜には夜の顔があるし、昼間にしか手に入らないものだってあるんだ。

「あのね？ 別に何かモノが欲しい訳じゃないの。ただ……」

「ただ？」

「明日の朝までの優作さんの時間、ちょうだい？」

多分数十秒は固まっていたと思う。

夜を共に過ごしたことは……まだなかった。

それは、つまり、そういう意味？

驚かされる。

やっぱり、彼女には驚かされる。

渋谷で会った時と同じように、予測がつかないことをしてくれる。

「その台詞って、普通男の台詞だと思うけど？」

ため息と一緒にそんなことを呟いてみた。

えへへと小さく舌を出すと、彼女は「そのかわり、優作さんに私の明日の朝までの時間、プレゼントするから、いいでしょ？」って聞

くんだ。

そうやって、いつも俺を振り回すんだ。

俺が彼女に捕まってしまってることを分かってて、俺のことを振り回す。

まったく！！

なんて、愛すべき女なんだ、彼女は。

俺は自分のグラスをテーブルに置いて、彼女に手を伸ばす。

肩を抱いて引き寄せると、思いの外細い肩で……。

俺はそのまま彼女の髪に顔を埋めると囁いた。

「有希子……、好きにしていよいよ、俺のこと」

彼女が小さく笑ったような気がした。

好きにしていよいよ、本当に。

今晚だけじゃなく、この先もずっと、いつまでも……。

そして俺は明日の朝言うんだ「Merry X·mas」って……。

きつと、来年も、さ来年も、その先も……言うんだ。

完

W i n e B o n b o n みっつ ( 初出 : 0 4 / 0 2 / 0 8 ) ( 前書き )

優作と有希子でバレンタイン話

「すっごく寒かったあ〜!!」

今年流行りのラインのコートにマフラーをぐるぐる巻きにして、両手に息を吹きかけながらドアを開くと同時に彼女が飛び込んでくる。改めて見ると、外は雪。

彼女と共に入り込んできた冷気で、部屋の温度が下がったのだろう、エアコンが少しだけ温風を吹き出す量を増やしたようだった。

マフラーをとり、手荷物とともにソファの端に置くと、彼女は置いてあるクッションを抱え込んでソファに身を沈めた。

「コートくらい脱いだらどうだ？」

そういつてソファの後ろから彼女の顎をとると、「だって、まだ寒いんだもん」と拗ねたような声。それを遮るように唇を軽く重ねる。気がつけば、当たり前前のように交わされる口吻。それだけこの関係にお互いに狎れてきた証拠なのかもしれない。

「今日のスケジュールは？」と訊ねた。

彼女は、最近とにかく忙しいのだと言っていた。

電話でさえ、かかってくるのは不規則な時間で、それも5分、10分と云う短時間しか話せない。

それが徐々に、気紛れのように顔を出したと思ったら、もう深夜に近い時間。この後にスケジュールが入っているなど考えたくもなかったが、それでも一応訊ねてみる。アイドルのスケジュールは非人間的なそれである事も少なくはないと云う事は、彼女とつきあい始めて身に沁みて実感している。

「今日はもうおしまい」

そう言つて前で指を絡ませて伸びをすると、あらためて大きく息をつく。

「そっか、それはよかった」

彼女の髪に指を差し入れると、思いのほか低い温度にびっくりする。

そしてかすかな湿り気。

外の雪を思い浮かべ、彼女がすぐ近くで車を降りたのではなく、結構な距離を歩いてきたのだと察した。ここに来るのをマスコミに嗅ぎつかれない為には、仕方がない事なのだろうと分かってても、この寒さを思えば溜め息の一つもつきたくなくなるというものだ。

この関係が公になっては困るというのは、彼女の所属事務所の主張。彼女を取り巻くマスコミの攻勢、ファンの騒動……そういうものが攻撃性となって彼女を押しつぶさないとは限らないからというのが、その理由。

ファン心理というのは案外複雑なもので、一方的に想いを寄せていたとしても、彼女が一人であれば秩序を保つものだ。それが誰かのものになったと知れたなら、それまで想いを寄せていたはずの当の彼女自身への憎しみへと容易にすり変わるのだ。

俺への攻撃ならば甘んじて受ける事もできる。

けれど彼女への攻撃となると、今はまだ、守りきれただけの力が俺にはない。だから、今の公にできない関係を受け入れるしかない。けれどその一方で、公にできるその力を1日でも早く手に入れたくて、ただひたすらに執筆をしている。

もちろん、物を書くという事そのものへの欲求はつきないけれど、今はそれにちょっとだけ違う色合いも混じっていると思う。

それは、守りたいものの存在を意識しながらという訳ではなくても、執筆姿勢や作品に微妙な変化として現れているようにも思っていた。悪い変化ではないと俺自身は思っている。

ようやく彼女がコートのボタンを外しはじめた。

室内の暖かい空気に肌が馴染んできたのだろうけど、芯から冷えた身体がそれほど簡単に温まる訳はない。

「今日は何時までだ？ 温かいもの淹れるけど、ゆっくりできるバージョンと、ゆっくりできないバージョン、どっちがいい？」

俺がそう問いかけると、彼女は「今夜だけじゃなく明日も昼くらいまでゆっくりできるバージョン」と笑いながら言った。

「そりゃ、珍しい」

俺も同じように笑いながらそう言うと、もう一度彼女に口吻けた。世間では明日は祭日で、休みの前日である今宵を共に過ごしているだろう恋人同士は、世の中にたくさんいるだろう。

けれど彼女にしても俺にしても、カレンダーの休みとは全く関係のない仕事をしていて、当たり前前の事だが、祭日の前だからとか、週末だからという理由で会う事ができる訳ではない。

それはある意味、世間の人の流れに乗れないという事ではあったが、反面、誰よりも目立つ彼女と外を歩く時に、幾許か気付かれ難くなるという事でもある。

悪い事ばかりでも、いい事ばかりでもないという事だ。

結局はお互いがお互いの世界の中でうまく完結していればいい事なのかもしれないなどと、埒もない事を考える程度には……そのズレが自分達には似つかわしいという事なのだろう。

俺は名残惜しさを伴ったまま彼女から離れると、キッチンに向かう前にサイドボードから貰い物の赤ワインを1本とり出した。

それを視線で追うと、彼女は「ワイン？」といぶかしげに訊ねる。

彼女は一応未成年。

アルコールはまずいと言えはまずい。

もちろん、明日の昼迄いられると云う事であれば、1杯や2杯飲んだところで他所に漏れてスキャンダルになるという事はないだろうけれど、あまり褒められた事ではないというのは事実。

だが、アルコールが問題なだけだ。

「グリューワイン作るよ。身体温まるぞ」

「赤ワインを温めるの？」

ソファの背に腕をのせ、更にその腕に顎をのせて、彼女は興味津々といった風はこちらを見てる。

「アルコール飛ばして、酔わない程度にしとくよ」

そう言うと俺は引き出しからソムリエナイフをとり出して、コルク栓を抜いた。

「赤ワイン、嫌いじゃないけど、温めたら渋さがいやじゃない？」  
彼女が赤ワインの渋さを知っている事に、俺は心の中でおいおいと突っ込みを入れる。

もつとも、イブにワインを飲んだ時も、慣れた風だったと思い返すと、少しだけ首を竦めた。それにあの夜、彼女の年齢を失念して飲ませてしまったのは俺自身だった。

ミルクパンにワインをドボドボと適当に注ぐ。年代モノというほどの赤ワインじゃないから、澱なんて気にしない。

本当はグラニュー糖をカラメル状にしたところに赤ワインを注ぐのだけど、今日は俺と彼女の甘味に対する好みが違うから仕方がない。彼女の好みに合わせると、とてもじゃないけど甘過ぎて、俺には飲めない代物になる。もちろんおいしくないという意味ではないけれど……。

「渋味が気にならない程度に甘くするよ」

彼女に背を向けたままそう答えた。

このところ執筆が一段落という時期だったので、香辛料などの補充もしていたのは丁度良かった。

小さなキャニスターを選び出すとクローブを2個取り出して鍋に放り込む。

それほど料理はしないけれど、もともと凝り性なところもある。グリューワインひとつ作るのだって、ついつい本格的にしたくなる程だ。珈琲淹れるのも、紅茶を淹れるのも、ちよつとしたつまみを作るのも同じ事。だから少しずつ揃えていったせいか、気が付けば一般的に家庭に常備されているものよりも格段に多い種類の香辛料が揃ってしまっていた。

ガスを弱火にしてゆっくりと温めはじめると、俺は冷蔵庫の中からオレンジを取り出す。

ナイフで皮を少量削ぎ落とすと水洗いして水分を拭いてから、同じように鍋の中に放り込んだ。

いつもならすぐに横に飛んできて、興味深そうに手元を覗き込むは

ずの彼女が全然横に来ない。不思議に思っ  
て振り返ると、手荷物を  
ごそごそと探っている。

けれどそれは緩慢な動作で、いつもクルクルとテンポよく動いてい  
る彼女には似つかわしくない気がした。

俺はそのまま彼女を見つめる。

その視線を感じたのか彼女が顔をこちらに向けた。

そして、にこつと笑うと、「あのね、これ……」と言っ  
てきれいにラッピングされた包みを差し出した。

俺は彼女に近付くと「何？」と訊ねながら包みを手に取った。

「なんでしよう？」

彼女は俺の反応を楽しむようにそう言  
うと、包みを開けるよう動作で促す。

出てきたのは砂糖菓子の一種である  
ワインボンボン。

首を傾げたままの俺に、彼女は「本  
当はチョコレートをコーティング  
しているのがいまいかなあって思  
ったんだけど、優作さん甘いもの  
そんなに好きじゃないでしょ？  
これなら執筆の途中にちよつと糖  
分が欲しくなったら口にできるか  
なあって思って……ワインたくさ  
んサイドボードにあるってことは、  
ワイン好きなんだろうと思っ  
たし……」と、最後は俺の反応を  
探るような口調でそう言った。

「バレンタインには、ちよつと早  
いけど……、当日は仕事がビツ  
チりつまつて渡せそうになかつた  
から……」

あ、そうか。

前倒しのバレンタインプレゼント  
ってことか。

俺はようやく要領を得たという表  
情を浮かべて彼女を見た。

「ありがとう」

そついうと、彼女の髪をくしゃつ  
と掻き回す。

「もう……!!」

彼女が頬を膨らませて髪を押さ  
えながら抗議の声を上げるのを聞  
き流して、その頬に口吻ける。

そしてそのまま唇を重ねた。

啄むように何度も。

そして少しずつ深くなっていくそれ。

口の端から漏れる吐息。俺の袖を彼女が縋るように掴む。彼女の髪は少しだけ熱を取り戻していた。

ワインの馥郁たる芳醇な薫りが鼻腔をくすぐる。

ゆっくりと彼女から離れると、潤んだ眸が俺の視線を捉えて揺れていた。

ワインを火にかけて放っておく訳にいかない事を思い出して、俺はキッチンに戻った。

彼女がソファにトサツと倒れこんで、クッションにその綺麗な顔を埋めたのが気配で伝わる。

俺は食器棚からなるたけ厚手のマグカップを選び出すと、また別のキャニスターからシナモンスティックを2本取り出し、マグカップに1本ずつ入れておく。そして今もらったばかりのワインボンボンを空いているガラス瓶に移し替えた。

茶漉しでオレンジピールとクローブを受けながらマグカップにグリユーワインを注ぐ。

濃紅が白いカップに映える。

トレーにカップ二つとワインボンボンを入れたガラス瓶を載せると、ソファの前のテーブルに運ぶ。

彼女はソファに身体を横たえて、クッションを抱きかかえたまま、いまだ潤んだままの眸で上目遣いに俺を見つめた。

それに笑みを返して、「温まるぞ」と言っただけでカップを彼女の前に置く。

彼女がゆっくりと身体を起こした。

俺は彼女の隣に座る。当たり前のように……。

そしてガラス瓶の蓋を取る。

自分のカップにワインボンボンをひとつ落とすとシナモンスティックでボンボンを溶かすように掻き回した。

「何個？」

俺の問いかけに返事がない。  
振り向くと困ったような表情。

「どうした？」

「グリュウワインにワインボンボン入れるの初めて見たから……」  
そう答えた彼女は、どのくらい甘くなるのか分からないと付け加える。

「そっか、普通は2〜3個だけど、少なめに入れて、飲んでみてから調節したらどうだ？」

普通といったものの、ワインボンボンを溶かし込んで甘味をつける事は一般的ではない。

ただ、俺自身はこれを結構気に入っている。

グリュウワインを作ろうとしたところにプレゼントされたワインボンボン。

偶然のタイミングというのは、不思議なものだと思わされる。

「じゃあ……みつつ」

それが彼女の少なめかと思って、俺は少しだけ笑いながら、ひとつ、ふたつ、みつつと口にしながら彼女のマグカップに落とす。

彼女はシナモンスティックを手にとると、濃紅の液体の中でゆっくりクルクルと回した。

両手で包み込むようにしてカップを持つと、彼女は恐る恐るという感じで口を付けた。

コクツと喉の鳴る音が耳を掠める。

俺は首を傾げたまま彼女の表情を覗き込んだ。

「美味し……」

ホウと息をつくように彼女がさういって、俺は「良かった」と言つて、自分のカップに口を付けた。

身体にゆっくりと熱が染み渡る。

俺は彼女の肩に手を回し、彼女の長い髪を一房とって弄ぶ。髪にもいつもと変わらない熱が戻っている事を確認した。

アルコール分は飛んでいるはずなのに、彼女の眸ははまだ潤んだま

まで、酔った様に俺を見つめる。

その眸に宿る熱が、グリユーワインの齎したもののか、それとも……。俺には判断は付かない。付かなくてもいいようにも思った。

俺の中に広がる熱も、グリユーワインに齎されただけではない事に気がついてるから。

そしてそれは心地よくて……。

彼女が俺の肩に頭を預けてくる。

その重さが愛おしかった。

グリユーワインは身体を温める。そしてそれは長く続く。

自分の中に広がる熱、そして、互いに触れあつた身体から混ざり合う熱。

その境目も無くしてしまふまでの刻を、ゆっくりと感じていたい。

その熱に身を委ねるための時間は、まだたっぷりある事も知っている。

それは、グリユーワインよりも甘くて蕩けるような刻で、その先に待っているのは、ワインボンボンよりも甘い。

ワインボンボンみつつ分の甘さ。

それを思いながら、俺は彼女の髪に口吻ける。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3707g/>

---

優作・有希子短編連作集

2010年10月10日03時57分発行